
やはり阿部さんは素晴らしい

月曜日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やはり阿部さんは素晴らしい

【Nコード】

N7699V

【作者名】

月曜日

【あらすじ】

清田さんは、とても素晴らしいムツリスケベでした。清田さんが連行され、暫く経ち、やっとの事で清田さんが解放されました。

清田さんを待っていたのは、就職、金

そして生活の問題。もう野宿生活は嫌だと感じた清田さんは、就職を決意しました。そこで待っていたのは、思いも寄らぬ問題でした。清田さんが行く、ほのぼの異世界探索記です。多分恋愛もあります。あらずじ変更しました。文章が稚拙で、色々と変ですが、よろしければ読んでみてください。

第一話 太陽光が反射しました

清田さんが異世界トリップしたのはつい先程の事です。清田さんは初めのうち、ドッキリが何かだろうと思っていましたが、ドッキリを仕掛けてくれる友達はいなかったという事に気づきがつくりと頂垂れました。

それにしてもここは何処ですか。

清田さんはそう逡巡しました。

手元にあるのは、学生鞆の中に入った数冊の教科書と飲料のみ。

ぐるりと辺り周辺を見渡すと、みごとに田園風景が広がっていました。爽やかな風です。

稲穂が青緑に染まり、紫や紅色の花が華々しく揺れていました。遠くには日本の書院造の様な

建物がぼつぼつと見えています。またその奥には見上げるにもつらい山々が連なっており、太陽がよいこさと御顔を出しておられました。

人気は無さそうでしたので、清田さんは辺りを探索する事にし、適当に人が居る所に足を運

ばせました。清田さんの黒髪が微風に揺れます。生憎学校帰りでした故、服装は膝丈までの

スカートとブラウスです。清田さんは、スカートよりもズボン類の方が落ち着くタイプですので

恨めしげにスカートを一瞥し、パンパンとスカートを叩きました。

見覚えの無い風景ですよ、どうしたことでしょうか。

清田さんは歩きながら軽く深呼吸をしました。家では親が晩飯を炊いている頃でしょう。

これが夢だったらいいのにな、と軽く頬を抓みました。痛そうに清田さんは頬を擦ります。

清田さんが畦道を歩いていると、遠くに畑作業をしていると思われる人が居られました。

清田さんがゆっくり忍ぶように歩いてゆくと、畑作の人が訝しむようにこちらを見えています。

あたふたとする清田さんを尻目に畑作の人はまた作業に没頭しはじめました。50代半ばでしょう

か、丁寧にかりあげられた頭が太陽光に反射しています。服は茶色の布をあしらった様に見えますが、少し乱雑に作り上げられていました。

「すみません。あの、お時間頂いてもよろしいですか？」

清田さんの少し低めの声が響きました。畑作の人がこちらをまた訝しむように見て、

意味が分からない発音の言語を發しました。

清田さんには意味が分かりません。ここは異国の土地なのですから、言葉が

違うのは当然の事です。清田さんはそこまで頭が回っていませんでした。

「すみません、人違いです」

清田さんは一礼をして、そそくさと退散します。

こんな事も考えられないなんて、わたしも落ちぶれましたな……
ああ、作業を中断させてしま
って畑作の人すんません。

そんな事を清田さんは考えていました。清田さんは、畑作の人の方
を一度も振り返らずに、

真っ直ぐに畦道を歩いてゆきます。ひゅっひゅっとな風が吹きました。
清田さんはどうしていいか

分からずに、とりあえず暗いほう暗いほうへと歩いてゆきました。

第二話 清田さんがシリアスになりました

「それにしてもここは何処なのですか」

清田さんはそう呟きました。いつの間にか、異世界へとトリップしてしまっただなんて、清田さんには考え難い事です。鞆にあった飲料を少し口に含みました。美味い水だ。清田さんはそんな事を考えながら、ぼーっとする頭を回転させました。清田さんは今、畦道から歩き、人の気の無い家の壁に寄りかかっています。

少し日が暮れ、空が赤くなりました。

きっと第三者から見れば清田さんの存在感の薄さに驚くでしょう。清田さんは今、家の壁の影と同化しています。ですから、ぼーっとする清田さんの横を誰かが通っても、誰も見向きもしませんでした。清田さんもぼーっとしていたので、人が通った事を気づきません。

清田さんが居る家の壁を小道に挟んで、清い水が流れる溝がありました。その向こう側にはまた人気の無さそうな家があります。ここあたりに人は住んでいるのでしょうか、と清田さんは考えました。

清田さんは考え込みました。どうしてここへ来てしまったのかと、

どうしてここで生き抜いて
いくかについてです。なんくせ、言葉が分からないものですから、
清田さんは働くにも働けませ
ん。

どうしてここへ来たのかは置いておいて、取り敢えず言葉を何とか
せねばなりません。ああ、
どうすればいいのやら全く分からない！父や母が今頃心配している
だろうな。生きていく為の
食料さえあてが無い。わたしは生きられるのだろうか。それとも誰
かに拾ってもらおうか・・・
いや、それだけは御免被る。迷惑を掛ける事だけはごめんだ！

清田さんの頭の中でそんな事が目まぐるしく回っていきました。き
つと清田さんが空腹か精神的
負担で倒れば、誰かが助けてくださるでしょう。ですが、清田さ
んはどうしてもそれだけは嫌
でした。恩をつくられるのはむしろ嬉しいけど、迷惑を掛けるのは、
恩をつくるのは清田さんに
とってどうしても許容できない事でした。

ですが、独り身な故、迷惑を掛ける可能性は極めて高い。清田さ
んは絶望にうちひしがれてい
ました。

きつと今、親が必死になつて清田さんを探しているでしょう。清田
さんはあまりその事を頭の中
に入れたくありませんでした。警察に届け出されるのも時間の問題。
でも、それは無駄骨折りな事
です。

清田さんの腹がぐうぐうと鳴りました。飲料水ももうすっかりかんです。清田さんは空腹を紛らわす為、就寝につきました。困った事は明日、考えればいいじゃない。それが清田さんの一つの逃げ道でした。

第三話 食料になりそうな何かがありました

清田さんが目を覚ました時、眩い光を放つ太陽が目の前に居るような感覚に陥りました。

目を閉じていても、光だけが目蓋を通して目に映ってしまう。太陽を見ている時と同じ様な感覚でした。

清田さんが驚いて目を開けた時、真っ白に光る何かがふわふわと飛んでいました。それは右往左往しながら、清田さんの目の前をすうと通り過ぎていきました。

その何かは、繊細で、一本一本の毛が、白く輝いていました。風に漂う、タンポポの種のような、そんな不安定で可憐な

それは、清田さんにはとても可愛らしく、愛らしく見えました。慌てて清田さんは体を起こしました。枕代わりの鞆が汗ばんでいます。

清田さんが呆然としながらそれを見ると、何か叫び声が聞こえました。

小さい歓声をあげながら、畦道を忍ぶ様に歩いてきています。少年達がそこに居ました。

何かをこそそと話すと、足音をたてないように、慎重に少年達は手にしていた網を掲げました。蛍光灯の様な淡い光を放つそれは、まるで気づいていないかの様に、そよそよと飛んでいます。

少年達は、手にしていた網をそれに荒々しく投げつけました。それは勢い良く下降線を辿り、

地面で慌ておののきます。白い毛の一本が散り、眩い燐光を放ち、消滅しました。

少年達は緊張したような、嬉しくて興奮したような面持ちで、白いそれに近づきました。

リーダー格の少年が皆を下がらせます。すると、少年はそれを網から取り出し、自の手の内で、殴り始めたのです。

それは、くちやくちやと鈍い音をたてながら、白い液体を出します。液体が出ると、少年は汚そうに払いのけ、より強く殴る様に見えました。

「えっ」

清田さんは小さくその言葉を発しました。自らの目の前で、そんな横行が行われているのです。

しかも、清田さんは気づかれています。如何してでしょう。清田さんは、少しがつくりと

しながら、目の前の事の経緯を考えました。白い何かがきて、少年が来て、殴った。

それしか分かりません。深い因縁でもあるのでしょうか。それが、そういった風潮の世界なのでしょうか。清田さんにはどちらとも確証付け難いことでした。

白い何かが、ふわっと、急に消滅しました。少年の手の中には、指輪の様な、ブローチの様な
何かが握られています。あれは何でしょう。

少年達は慌しく網と、周辺に落ちた白いその毛を一本残らず拾い上げると、畦道を通り、影に消えました。

清田さんは困惑していました。が、この世界のルールを知らないと、反論は出来ないでしょう。そういつところかも知れない。自分が異常者なだけだ。そう清田さんは思おうとしました。

「…………ふう」

清田さんは溜息をはきます。なんだか意味が分からない。どうしよう。そして、腹も減った。生きる為にわたしは何をすべきなのか分からない。どうにかして、あてを探さないと。

焦燥感に駆られた清田さんは、食料となるべきものを探し始めました。

畑を探し、畦を探し、清田さんが漸く食べられるものを探した時、もう日が暮れようとする所でした。清田さんの腹は、空腹を通り越して、痛みを通り越して、無の感覚に陥っていました。

清田さんが探し出したものは、筍と類似する物体と何か食べれそうな大きな葉を持った茎、裂くと綿が出る植物でした。これでも結構量があるので、清田さんは自分の眠っていたところへもう一度戻り、満足げに並べました。食べれるのならなんでもいいや。清田さんはまず、一番に食べられそうな筍らしき物体を口に運びます。

硬そうに清田さんの口内ではごりごりと鳴る触感と戦っていました。何故か苦い。そして表面

の皮を剥いでいない。硬い。ですが清田さんの面持ちは満足げに光輝いていました。

一回り食べ終わった後で、何も問題ない事から、当分の食料はこれだなと清田さんは決めました。

不味くても、硬くても、食べれて問題なければいい。清田さんの価値観は一日で変わってしまっただけでした。

第四話

変なものが居たんですが消えました

清田さんは暮れた日を、田んぼの真ん中で何も遮られる事無く見たことは、久しぶりの事でした。

清田さんは比較的田んぼに囲まれた田舎に住んでおりましたが、最近では外出する事も少な

く、勉強勉強稀に遊び、という感じの生活だったので、田んぼの畦道を通ったりするよりはアスファルトの整備された道を通る方が最近が多かったのです。

清田さんは、白い物体の事を気にかけていました。あれは何。そして何。疑問だけが浮かんで

消えてゆきました。清田さんの学生服はもう泥に塗れて、破れてはいませんでした。元の白いブラウスの色は茶に染められていました。

清田さんがここへ着てから何日が経ったでしょうか。2日しか経っていないようですが、清田

さんにとっては一週間も何年も経った様な気がしていました。学校指定の白いハイソックスも

もう泥で塗れ、靴は破れかけています。何年も履いていた靴ですから、何もしていかなくてもじきに破れたでしょう。

清田さんは、完全に視界が闇に遮られるまで、周辺の食料をかき集めました。畦に生えた硬い茎、寝床の傍に流れる清水、それらの全てが清田さんにとって大事なものの源なのでした。

そろそろ火が欲しいですね。そんな事を清田さんは思っていました
が、それを手にするのは

夢のまた夢。先人の辛さと苦勞を清田さんは思い知りました。

清田さんも気づいていたようですが、周囲の目が気になってきた
頃になりました。

すれ違う人々とは違う格好をしているのもあるでしょうが、何より、
知らない人だったので

周辺住民は清田さんの事を心配するような、気味悪がるようなよく
分からない気持ちで、清田
さんを見守っているのです。

清田さんもそれには申し訳なさそうにしていましたが、今は気に
しない事に決めています。

言葉が通じないから仕方ないのよ。そうそう。清田さんはそれを頭
のなかで決め込んでいました。

清田さんは、友人や周りに干渉されないこの時間を、楽しんでいる
ようにも見えました。

眠たくなったら眠り、眩い日差しに起こされる。そんな事が今のわ
たしには大事な事なのかも
しれません。と、清田さんはぼんやり思いました。

朝です。清田さんは、時間に悩む事無く目を覚まします。上体を起
こし、枕代わりの鞆を懷に
戻し、汚れて乾いた土を服から払い落としました。近くにある溝に
流れる清水で顔を洗います。

清田さんの野宿する家の壁付近は、あまり人が通らない様でした。
最初は通る人も見受けられ

ましたが、運の良い事に、畦道を通るおじいさん、おばあさんの死
角に清田さんは野宿してい
たので、ばれる事はありませんでした。

清田さんは当たり前の様に筍らしき物体を頬張ります。
食べれるって素晴らしいことなんだと清田さんは感動しました。
腹を下す様子も無いし、ここ
の食べ物っていいかんじです。

本当に、良い感じですよ。

清田さんは二回思いました。

ふと、清田さんは気づきます。

何かの気配がします。

清田さんは首を周囲に回しながら、耳をそばだてました。茂みと
擦れる音が、少し離れた所
から聞こえてきます。

ひょっこり。

清田さんは目を見開きながら、上体を何かと離れた方向へ見開き
ました。食べかけの筍Aを
危うく吐き出してしまいそうです。

何かは半透明の桃色をしていました。動き方は、まるでナメクジの
様です。小さい触手をぬる

ぬると動かして、ゆっくり全身してきています。少し動かたびに、ゼリーの様に揺れています。目は、卵をそのままはめこんだ様に、明らかに硬そうで、何より、粘液の様なものが垂れています。大きさは典型的な女性体型の清田さんの膝元にも及ばず、とても小型なものでした。

清田さんは、

異世界ってすごいな、

と、とても長閑な事を思っていました。

と。

ふと。

清田さんがそんな事を思っていると、ねばねばした半透明Aが、近くに落ちていた少し太めの枝に引っかかりました。枝が半透明Aの粘液に刺さり、半透明Aの粘液の中に枝が入ってゆきます。すると、半透明Aが苦しそうに蠢き、霧状になって、空気に溶けていきました。

枝に、半透明Aが、負けました。

清田さんは喫驚しました。

第五話

女性を見ると、にやにやします

清田さんは朝、がりがりと野野菜を食べ、夜になると就寝する生活が続いています。

特に難しい事は考えていません。困った事と言えば、服が汚れている事と体が洗えない事だけです。清田さんには生きてゆけるだけで充分でした。白い物体の事も、半透明の事も、異世界だから仕方ないぐらいとしか考えていません。きっと地球には居ない小型生物なのだろうと、そんなぐらいなのだろうと清田さんは思っていました。

「ねえ、あの子誰なの？」

「知らないけど、死なないか心配だわ」

「まあ大丈夫じゃない、今生きているんだし」

「それよりさ、あの家の……」

主婦達は噂話に勤しんでいました。

周辺住民達は清田さんの事を心配していました。きっと親切な人達なのでしょう。野山を歩き

畦を歩く清田さんの背格好を見ながら、あの若い娘は誰とぼやき、形容しがたいあやふ

やな気分になりながら日々過ごしていました。

清田さんに朗報が出来ました。穴場スポットが見つかったのです。そこは野山を少し進み、獣道から外れた所にある、一人一程が入れるぐらいの、池でした。覗き込むと、下の地面まで見えるぐらい、澄んでいるうえに、清田さんの腰ぐらいまでしか水が無いので、体を洗うのには最適の場所でした。

水飛沫が跳びました。清田さんは時間を忘れ、体を洗い、髪を洗いました。土臭かった体は無臭になり、髪も無臭になって清田さんはご満悦です。

清田さんが最後に池を覗き込むと、自分の顔が水面に映りました。死んだ目をした、疲れた顔をした女が、こちらを向いてにやっと笑いました。清田さんは惨めな気分になりました。

夕焼けが空に満ち、清田さんは帰途につきました。

清田さんが野宿場に戻り、残りの野菜を頼張っていると、ある音に気づきました。

人です。清田さんはそう思いました。人だからと言って恐れる訳でも逃げる訳でもありませんが、そう思いました。ただ、自分の前を過ぎていくか、他の道を通るのか、それだけだろうと思っていました。

ところがどっこい。

軍服を身に纏い、銃を携えた女性が、こちらへ向かってくるではありませんか。

清田さんは吃驚しました。腰丈まである、艶やかな銀色の髪に、

絶妙のプロポジション。

切れ長の目に、凜々しく描かれた眉。小さく整った鼻に薄い唇。美人でした。清田さんは何をされるのかとはらはらしていました。

清田さんの手を女性は取り、立ち上がらせました。誰ですか、あなたは誰ですか。清田さんはそう頭の中で念じました。

女性は清田さんを指差し、後ろへ何か問いかけました。すれば、ひよっこりと主婦らしき朗らかな女性らが数人、物陰から出、うんうんと頷きました。

悪い噂流れてたら嫌だな、清田さんは僅かながらにそう感じました。

女性が清田さんを先導すると、清田さんは暴れる事無く、素直に女性の跡についていきました。殺されたりしたら困るな、清田さんはどうか殺されませんようにと祈りました。痛いのは無理です。

第五話

女性を見ると、にやにやします（後書き）

ご指摘あれば、ぜひよろしくお願い致します。

第六話 小屋の中で何をするのですか

清田さんは女性の後ろをついてゆきました。暫く歩いていくと、物騒なものが視界に入ってきます。

「馬だ・・・」

清田さんがそう呟けば、女性は不思議そうに清田さんを見つめます。まぎれもない馬でした。艶のある高貴な馬が、田んぼの畦道にうついておりました。

時には畦の花を齧り、虫を弄りながら退屈を紛らわしていた馬でしたが、女性を見るとたちまち目を輝かせました。相当懐いているのでしょう。清田さんはまるで空気のようにでした。

女性が馬と少し戯れた後、清田さんは女性に誘導され、馬の上に足をかけました。思うより不安定で、ごつごつしている馬に驚きながら、軽々そうに女性も馬にのりました。

一匹の馬に二人の人間が乗ったにも関わらず、馬は平気のようです。清田さんは無意識に

女性の腰に手を回して、自分が安定するようにしました。こうでもしないと、落馬しそうだったのです。

終止無言の状態が続きます。日は暮れ、紅に染まっていきました。馬の足音だけが音になって消えていきます。女性のゆったりとした息遣いは、聞こえそうで清田さんの耳には聞こえません

でした。

こんなに時間が過ぎ去っても、あたりの風景はあまり変わりませんでした。遠くに賑やかそうな街が見えていますが、大きさは米粒程度です。目的地はどこなのでしょう。聞いたって分からないのですが。

また暫く経ち、もう夜でした。服に透けた風が寒く、大分冷えていました。賑やかそうな街は気づかないうちに見えなくなっています。暗い所為なのか、遠い所為なのかは清田さんには分かりませんでした。

初めから終わりまで終止無言でした。清田さんは痛む腰を片手で叩きました。じきに、馬が止まり、女性が馬から降りました。清田さんも見よう見真似で馬から上手に降りようとおもいましたが、やはり無理なようです。拳句清田さんは女性に支えられながら、ゆっくりと降りていきました。

辺りを見回すと、周囲には一軒の小屋しかなく、後は木に囲まれていました。

清田さんは女性の方を見ると、女性はゆったりとした動作で馬を撫でていました。美人は何をやっても様になります。唇をあげて微笑む仕草はまるで天使のようです。

いきなり、きゅる、と馬が音をたてました。清田さんは吃驚して馬

を凝視します。

きゆるきゆるきゆるきゆる

まるでお腹がなっているかのように、馬は体内からそんな音を発しています。この音がやけに

大きく、黒板を爪で引掻いたような不快な音でした。

清田さんは目を見開きました。馬が跡形もなく消え去ってしまったのです。

本当に一瞬で、清田さんはその瞬間を見逃してしまいました。

「まずは部屋に入ってから説明しようかね」

女性はそう言いました。言葉が通じる事に清田さんは吃驚しました。

「これは、魔術なのだよ」

女性は清田さんの胸の内を読み取った様に言います。

「さあ、中へ入ろう。寒いしね」

女性がそう言うと小屋の中へ入っていきます。清田さんもつられて小屋の中へ入りました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7699v/>

やはり阿部さんは素晴らしい

2011年10月14日21時50分発行